

英語科研究プロジェクト

中高6年間を見通したシラバスの作成（2）

—スピーキングのシラバス—

筑波大学附属駒場中・高等学校 英語科

寺田 恵一・加藤 裕司・久保野雅史  
末岡 敏明・鈴木 文子・八宮 孝夫  
平原 麻子

英語科研究プロジェクト  
中高6年間を見通したシラバスの作成(2)  
—スピーキングのシラバス—

筑波大学附属駒場中・高等学校 英語科

寺田 恵一・加藤 裕司・久保野雅史・末岡 敏明  
鈴木 文子・八宮 孝夫・平原 麻子

本稿では、中高6年間を見通したスピーキング能力育成のシラバスを提案する。6年間を本校の「カリキュラム改革調査研究プロジェクト」に従って、2年ずつ「基礎」「実践」「発展」の3期に分けて、各期の到達・指導目標を決め、それを基に各学年の目標を具体的に設定した。この目標を達成するために中学1年から高校3年までの各学年に設けられた活動は、簡単な自己紹介に始まり skit, show and tell, recitation, speech, presentation (summary, opinion) 等の多岐に渡る。これらの言語活動や評価の実践を具体的に報告する。

キーワード：中高6年間・シラバス・スピーキング

### 1. 中高一貫のスピーキング・シラバス

#### 1.1. 研究目的

1995年度に始まった全校的取り組み「カリキュラム改革調査研究プロジェクト—中・高一貫校のカリキュラム構成に関する基礎的研究」と連動し、英語科では1998年度に教科プロジェクト「中高6年間を見通したシラバスの作成」(5年計画)を開始した。このようなテーマを設定した理由は、

- ①中高6年間を通して系統的・効果的にコミュニケーション能力を育成するには、6年間を見通したシラバスの作成が必要である。
- ②シラバスの検討・作成を通じて、教科内で指導目標・指導技術について共通理解を深める。

の2点にまとめることが出来る。この本校の試みは、緑川(1999)で次のように紹介されている。

筑波大学附属駒場中・高等学校で始まった共通カリキュラム構想がおもしろい。指導内容も方法も教師の自由に任されているが、指導目標と指導項目については全ての教師が共通理解をして足並みをそろえようというものである。

(下線は引用者による)

#### 1.2. 研究計画

本プロジェクトは、以下のような5年計画で進行中である。

- ・1年次(1998年度)：先行理論・実践の調査  
リスニングのシラバス・到達目標の作成
- ・2年次(1999年度)：スピーキングのシラバス・到達目標の作成
- ・3年次(2000年度)：リーディングのシラバス・到達目標の作成
- ・4年次(2001年度)：ライティングのシラバス・到達目標の作成
- ・5年次(2002年度)：シラバス試案の完成と今後の展望

本稿はその2年次(1999年度)の研究・実践を報告するものである。

本校の「スピーキングのシラバス・到達目標」を具体的に報告する前に、先ず「シラバス・デザイン」の必要性やそのあり方を検討する(1.3-4.)。次に新『学習指導要領』とイギリスの *The National Curriculum* のスピーキングに関する箇所を比較検討し、シラバス作成の基礎資料として整理する(1.5.)。

### 1.3. 「シラバス・デザイン」の必要性

新『中学校学習指導要領』の特徴は、

- ①外国語の必修化。
- ②いわゆる指定語が100語に削減。
- ③学年目標の廃止。

だと言われている。このうち「③学年目標の廃止」は現行『学習指導要領』で言語材料の学年指定が廃止され自由化されたことを、更に押し進めたものであると考えられよう。現行の「学年目標」は「聞くこと」を例にとると、

- ・1年次：聞くことに親しむ
  - ・2年次：聞くことに慣れる
  - ・3年次：聞くことに習熟する
- (下線は引用者による)

と、文言の上で差別化は図っているものの「どのようなことが出来れば、親しんだ／慣れた／習熟した」と判断できるのか具体性に乏しく、実体を伴っていたとは言いがたい。他の3技能(話す・読む・書く)も全く同様である。言葉の上で学年間の差異化を図ること自体が基本的に苦しいということは明白である。従って学年目標を廃止し「3年間の目標に1本化」したことは別の言い方をすれば「学年目標の自由化」と考えることも出来る。各学校で独自に「学年目標」を作成する自由・権利が与えられたということである。

但し手放しで喜んでばかりもいられない。「自由化」それ自体は歓迎すべきことであろう。しかし、これは同時に学年目標作成の「義務」が生じたことも意味しているのである。

従って、「シラバス・デザイン」の研究・実践の必要性は飛躍的に高くなって来ていると言えるだろう。

### 1.4. 長期的視点に立った到達目標の設定

— 「何を」「いつ」「どこまで」やるか —

英語教師は他教科と比べて『単元感覚』に欠ける」と指摘されることがある。これは何を意味するのか。

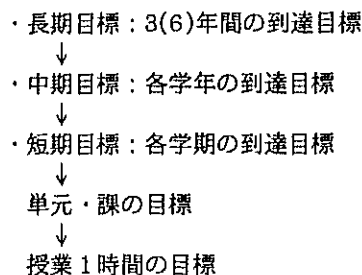
高橋(1999)は、このことに関して以下のように言い切っている。

1学期中間考査までに第1課から第3課まで進むなどという進度の割り振りなどは、教科書の教師用指導書に掲載されておりさしたる意味もない

(中略)むしろ、指導しながら絶えず調整できる、大まかな骨子となる指導目標(生徒にとっては学習目標を立てておけばよいだろう。(中略)

このような大まかな目標をもとに、年度の終わりなどに重点目標を具体化した活動を想定する。例えば、3年の重点目標が「自分の考えを英語で表現する力をつける」であれば、学年末に簡単なディベートを実施できないだろうか、といった具合である。これをひとつの実践目標とし、それを達成するためのプロセスとして、各授業を設計するのである。 (下線部は引用者による)

授業1時間の目標設定は、次に図示するように先ず「長期目標」を具体的に設定し、それを実現するための「中期目標」「短期目標」作成というように遡っていくべきであろう。



この手順をたどれば、「何を、いつ、どこまで」やるかを見通すことが出来るようになり、「教科書を1ページ進めること」といった漫然とした授業1時間の目標から脱皮することが可能となろう。

例えば、中学3年の3学期に「2分間のスピーチ」という到達目標を設定したとする。この目標に到達しようとするれば、中学1,2年の学年末も到達目標が決まって来る。学年末の目標が決まれば、学期末の目標が決まり、単元・課の目標や授業1時間の目標が決まって来るはずである。学期末に何らかのスピーキング活動を行う目標を設定し、その様子を評価しようとする場合には、目標とした「活動」の実現に向けて、授業の中で「基礎練習」を着実に積み上げていく必要性が生ずる。全く指導せず急に力などつくはずはないからである。

このように、最低でも学期末の到達目標を具体的に設定することが、日々の授業の目標を明確にし、改善していく原動力となる。

## 1.5. スピーキングのシラバス

### 1.5.1. 本校の中高一貫シラバス試案

始めに、本校で作成・検討中の「中高6年間を見通したスピーキングシラバス試案」の骨子を示す。

#### <基礎期> 中学1,2年

・個々の発音・連音・リズム・イントネーション  
(基本)

・綴りと発音の関係(フォニックス)

・絵や物をヒントにした oral reproduction (show & tell, story telling)

・身近なことから英語で説明(自己紹介など)

#### <実践期> 中学3年, 高校1年

・リズム・イントネーションの効果的な使い方  
(応用)

・様々な形式による口頭発表(recitation, speech, skit)

・より内容のある事柄を英語で伝える(体験談、興味のあることの説明等)

#### <発展期> 高校2,3年

・より高度な内容を英語で伝える

・自分の考えが相手に正確に伝えられる

・意見交換ができる(discussion, debate)

このシラバスに関しては、「2. 各期の実践」の中で具体的な授業実践とともに詳しく説明したい。

### 1.5.2. 新『学習指導要領』

2002-3年度から実施される新『学習指導要領』から「スピーキング(話すこと)」に関する箇所を抜粋する。

#### <中学校>

##### (1) 言語活動

###### ア 話すこと

(7) 強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声の特徴に慣れ、正しく発音すること。

(イ) 自分の考えや気持ちなどが聞き手に正しく伝わるように話すこと。

(ウ) 聞いたり読んだりしたことについて、問答したり意見を述べ合ったりすること。

(エ) つなぎ言葉を用いるなどいろいろな工夫をして話が続けるように話すこと。

##### (2) 言語活動の取り扱い (省略)

##### (3) 言語材料

###### ア 音声

(7) 現代の標準的な発音

(イ) 語と語の連結による音変化

(ウ) 語、句、文における基本的な強勢

(エ) 文における基本的なイントネーション

(オ) 文における基本的な区切り

(下線部は引用者による)

#### <高等学校>

##### ・オーラル・コミュニケーション I

ア 英語を聞いてその内容を理解するとともに、場面や目的に応じて適切に反応する。

イ 関心のあることについて相手に質問したり、相手の質問に答えたりする。

ウ 情報や考えなどを、場面や目的に応じて適切に伝える。

エ 聞いたり読んだりして得た上表や自分の考えなどをまとめ、発表する。また、発表されたものを理解する。

##### ・オーラル・コミュニケーション II

イ 幅広い話題について情報や考えを整理し効果的に発表する。

ウ 幅広い話題について、話し合ったり、討論したりする。

エ スキットなどを創作し、演じる。

##### ・英語 I / II

ウ 聞いたり読んだりして得た情報や自分の考えなどについて、話し合ったり意見の交換をしたりする。

##### ・リーディング

エ 文章の内容や自分の解釈が聞き手に伝わるように音読する。

リスニングに関する記述で、言語材料の中に「語と語の連結による音変化」と明記されている(下線は筆者)。これは現行版にはなかった記述であり、聞くことの言語活動中の「自然な口調で話されたり読まれたりする英語を聞いて」という記述に対応したものと考えられる。「自然な口調」の英語では「同化・弱化・脱落」等の音変化が頻出する。これに慣れ親しむことが、「実践的コミュニケーション能力」育成の基本の一つになると考えて良いだろう。

### 1.5.3. *The National Curriculum*

文部省の『学習指導要領』は理念的な目標を示している。これをもとに各学校・教師が「行動目標」を具体化する際に役に立つのがイギリスの Department for Education(1995)の *The National Curriculum* である。発達段階に応じた行動目標いわゆる“Can do List”が具体的に記述されている点が大いに参考になる。

#### Attainment Target 2: Speaking

##### ■ Level 1

Pupils respond briefly, with single words or short phrases, to what they see and hear. Their pronunciation may be approximate, and they may need considerable support from a spoken model and from visual cues.

##### ■ Level 2

Pupils give short, simple responses to that they see and hear. They name and describe people, places and objects. They use set phrases for purposes such as asking for help and permission. Their pronunciation may still be approximate and the delivery hesitant, but their meaning is clear.

##### ■ Level 3

Pupils take part in brief prepared tasks of at least two or three exchanges, using visual or other cues to help them initiate and respond. They use short phrases to express personal responses, such as likes, dislikes and feelings. Although they use mainly memorised language, they occasionally substitute items of vocabulary to vary questions or statements.

##### ■ Level 4

Pupils take part in simple structured conversations of at least three or four exchanges, supported by visual or other cues. They are beginning to use their knowledge of language to adapt and substitute single words and phrases. Their pronunciation is generally accurate and they show some consistency in their intonation.

##### ■ Level 5

Pupils take part in short conversations, seeking and conveying information and opinions in simple terms. They refer to recent experience

and future plans, as well as everyday activities and interests. Although there may be some mistakes, pupils make themselves understood with little or no difficulty.

##### ■ Level 6

Pupils initiate and develop conversations that include past, present and future actions and events. They are beginning to improve and paraphrase. They use the target language to meet most of their routine needs for information and explanation.

##### ■ Level 7

Pupils give and justify opinions when discussing matters of personal or topical interest. They adapt language to deal with some unprepared situations. They speak with good pronunciation and intonation. Their accuracy is such that they are readily understood.

##### ■ Level 8

Pupils show increasing confidence in dealing with unpredictable elements in conversations, or with people who are unfamiliar. They discuss facts, ideas and experiences, using a range of vocabulary, structures and time references. They speak confidently with good pronunciation and intonation, and their language is largely accurate with few mistakes of any significance.

##### ■ Exceptional performance

Pupils discuss a wide range of factual and imaginative topics, giving and seeking personal views and opinions in informal and formal situations. They speak fluently, with consistently accurate pronunciation, and show an ability to vary intonation. They give clear messages and make few errors.

2000年版もインターネット上で最近公開された (Department for Education and Employment 2000)。また同様の試みとして、The Centre for Canadian Language Benchmarks(2000)の *Benchmarks 2000* もあるが膨大な量になるのでここでは引用しない。

## 2. 「基礎期」の実践

本校「基礎期」のシラバス試案は次のようになっている。

<基礎期> 中学1,2年

- ・個々の発音・連音・リズム・イントネーション(基本)
- ・綴りと発音の関係(フォニックス)
- ・絵や物をヒントにした oral reproduction(show & tell, story telling)
- ・身近なことがらを英語で説明(自己紹介など)

以下、これに基づいて中学1,2年の実践を報告する。

### 2.1. 中学1年生(53期生)

#### 2.1.1. 生徒の実態把握

スピーキング活動に限らず、さらに言えば、英語という科目に限らず、中学1年生を対象にした授業を始めるにあたって最初に力を入れなくてはならないのは、生徒の実態調査である。中学1年生と言えば英語学習のスタートラインではあるが、実態調査を行うと、スタートラインの段階ですでに生徒たちの英語学習歴や英語力が多種多様であることがわかる。一つの教室に英語圏からの帰国子女と英語を全く知らない生徒とがいるのであれば、教える側にはかなりの工夫が必要とされるはずである。小学校での英語教育が広く行われるようになって、学校により英語学習の量と質が大きく異なることは否定できない。したがって、実態調査の重要性は今後も変わることはない。

実態調査としてまず基本的な方法としてはアンケートがあるが、アンケートから期待できるのは「小学校で週に(月に)何回くらい英語の授業があったか」「何歳の時に英語圏にいたか」というような表面的な情報に過ぎない。例えば、アンケートで「小学校で英語の授業があった」と答えた生徒でも英語の知識が皆無に近いという状況は十分に起こりうる。それぞれの生徒がどの程度の英語力を備えているのかをできるだけ早期のうちに日々の授業の中で把握することが必要となる。

また、特にスピーキング活動に関して言えば、その生徒が外向的である方が活動に参加させやすい。内向的な生徒に対しては、その生徒が活動に参加しやすくなるようなタスクを工夫する必要がある場合がある。英語力とは別に、生徒の性格を的確に把握することが授業を活性化させ、適切な指導を行う上で重要な情

報となるわけである。

#### 2.1.2 発音の基本

日本語の発音が完全に身につけてしまっている生徒にきちんとした英語の発音をさせるのは大変な仕事である。中学1年生の授業では、英語の個々の発音、連音、リズム、イントネーション等すべてにおいて、その基本をゼロから徹底的に練習をさせなければならないが、その練習は大きく分けると次の2つのステップになる。

##### ①正しく発音させる

まずは正しく発音させるまでのステップである。英語の音をたくさん聞かせることが重要なのは当然だが、生徒は聞いた英語の音を正確に再現できるとは限らないので、正しく発音する方法を何らかの形で生徒に示す必要が出てくる。正しい発音方法を教える場合、音声学的に正確な説明をしても上手くいかない。むしろ、直感的、具体的、アナログ的な説明が上手くいくことが多い。例えば、「口を大きく開けて」と言うより「上下の前歯の間に指を1本入るくらい口を開ける」ということを動作で示す方がわかりやすい。このような発音指導のテクニックを日頃からできるだけ多くストックしておくことが重要である。

##### ②正しい発音を定着させる(無意識に口に出るようにさせる)

英語のある音を出せるように何度も練習し、ようやくそれが発音できるようになったのに、翌日同じクラスで授業をすともとの日本語風の発音に戻っている、ということは日常的に起こる。ある音を発音できるように指導すること、その発音を生徒に定着させること(無意識のうちに生徒の口から出るようにすること)とは別の問題であると考えざるをえない。正しい発音を定着させるには日常的に生徒の発音を観察し、根気よく個々に直していくしかないだろう。折にふれてLLを利用し、生徒に自分の発音を聞く機会を与えるのも効果的である。

#### 2.1.3. 文字指導とフォニックスの導入

フォニックスを導入する場合、どの時期に導入すればよいのかという問題がある。文字の導入以前にフォニックスの指導を始めるということはある得ないので、文字の導入後、どの程度時間をおいてからフォニックスを開始するかという問題である。1999年度の指導においては、文字指導を開始後すぐにフォニックス指導を始めた。

しばらくはフォニックスを導入せず、まずは個々の単語の発音と綴りに慣れさせることを優先する、という考え方もある。これは、いきなり規則的なことを話題にすることによって生徒の英語への抵抗感が高まるのを防ぐという効果がある。

一方で、フォニックスを早期に導入することは、外国語学習にありがちな「不条理感」を減じる効果がある。外国語を学習していると「なぜこんな言い方をするのか」と納得のいかない要素が次々と現れ、しかも納得のいかないまま「外国語だから（言葉だから）しかたがない」という理由でそれらの言い方を「覚える」ことを強要される。生徒は英語の学習を開始してまもなく「なぜ一つの文字をいろいろな読み方をするのか」「なぜ読まない文字を書くのか（語尾のeなど）」という疑問を持つようになる。そして、この点が納得のいかないまま、正しい発音と正しい綴りを覚えなくてはならなくなる。単語の学習だけで早くも不条理感を感じ始めることになるのである。ところが、フォニックスを学ぶことによって「複数の文字で一つの音を表す」という見方を身に付けることになり、（少なくとも単語の学習においては）生徒の不条理感はなくなる。

フォニックスを学習すると発音記号の助けなしに正しい発音が出来ようになる。しかし、少なくとも中学1年生のような英語学習の初期の段階においては、そのことよりも次の2点の方が重要である。まず第一に、フォニックスの学習によって、正しい綴りが書けるようになる（英語として不自然な綴りを書かなくなる）という点である。生徒は英語の綴りの体系に慣れていないうちは、非常に奇妙な綴りの間違いをする。これがフォニックスの導入により大きく減少する。第二の点は、フォニックスの学習は英語の個々の音を体系的かつ総括的に学習する機会となる、ということである。単語の発音指導は、新出単語の指導を中心に行われることが多く、場当たりのになりがちである。フォニックスの指導は、綴りと発音の関係を教えることであるが、発音指導という点に限って考えれば、フォニックスの指導は、発音記号を一つずつ読んでいくというような音声学のような指導をしなくても英語の発音を体系的にそして総括的に教えることのできる機会でもある。

#### 2.1.4. 一言自己紹介

中学1年生の初期の段階で行えるスピーキング活動に、「一言自己紹介」がある。これは生徒一人一人にとっては簡単なタスクで負担は軽い。まず、My name is

～.あるいは、I am ～.と言って自分の名前を名乗り、それに続いて、自分が言いたいことを一文だけ付け加えるのである。中学1年の初期であるから、

My name is ○○. I don't like Pokemon.

のような簡単な文になるが、もちろんそれで構わない。生徒は自分の名前の次に何を言うかを相当吟味することになる。たった一文しか言えないからこそ、その一文の中になんとかして自分の主張を込めようとする姿が見られるはずである。

教室で順番に指名してこれをやらせてもよいのだが、ビデオカメラを使用すると活動が活発になる。生徒を一行に並べておいてカメラを回し、全員分の一言自己紹介を一気に撮影するのである。1クラス全員を録画するのに10分間程度しかかからない。録画が終了したら再生して全員の自己紹介を観る。録音せずにやった場合とは異なる緊張感があり、観るときにも生徒の集中力が高まる。他のクラスの録画を見せても生徒は非常に興味を持って観る。

#### 2.1.5. オリジナルな対話へ向けて

英語学習の出発点に立つ生徒たちにとって、教科書の英文をきちんと音読できるようになることが重要ではあるが、ただ本文を繰り返すだけでは単調になり、学習意欲の低下につながる可能性がある。そこで、ある程度きちんと読めるようになったら、その一部を自分なりに変えて読ませる（対話させる）と授業が活発化する。生徒にとっては創造力を発揮できる機会であり、リーディング活動からスピーキング活動への発展となる。

教科書の本文を変えてと言っても、中学1年生であるから、変える箇所はごくわずかに限定して（最初は1語程度から）、慣れてきたら変更箇所を増やしていく。

<p>Kumi: This book is very interesting. Mukami: Is it? Kumi: Yes. It's <u>The Little Prince</u>. (書名) Mukami: Tell me about it. Kumi: It's about <u>a boy</u>. He's from <u>another star</u>. (本の説明) Mukami: Can I borrow it? Kumi: <u>Sure</u>. (貸してあげるかどうか) (NEW CROWN English Series 1)</p>
--

これは教科書にある対話だが、英文の一部を変える練習を日頃から行っていると、2学期ごろにはこの対

話を元に次々とユニークな対話文が作れるようになる。最終的には、この対話の Tell me about it. というセリフだけを残してその前後すべてを好きなように作らせたが（2学期末試験の問題として出題した）が、ほとんどの生徒が面白い対話文を作り上げることができた。

#### 2.1.6. 一幕劇

英文の一部を変更する練習に慣れたら、いよいよ完全にオリジナルな対話文を作らせ、劇として上演させることができる。クラスの中では各グループによる上演を互いに鑑賞し合い、また他のクラスの上演をビデオで鑑賞することにより、小さな文化祭のような雰囲気になる。

オリジナルの作品を作る楽しさを知ってしまった生徒たちは過度に意欲的になる可能性があるので、オリジナルの対話文を作らせる前に次のような注意を与えておいた方がよい。

##### ①対話は1場面のみとする。

生徒は「一方〇〇では」「それから〇年後」のように次々と場面や時間を変える物語を作りたがる。そして、演技をしている時間より場面転換のための時間の方が長い、というような劇になりがちである。そこで、1場面ですべての対話が終わる、という条件を与えておく必要がある。

##### ②対話は1分（あるいは3分）で終わること。

これは②と関係が深い。生徒は無闇に長い話を作りたがる。大道具や小道具などの舞台装置を使う場合でも、その準備と片づけを含めて5分程度で終わるように指示しておかないと限られた授業内で多くのグループに上演させるのが難しくなる。

##### ③観ている人がわかる英語を使うこと。

生徒は「面白いことがいたい」という気持ちが先走ってしまい、和英辞典などを使って難しい英語を使ってしまうことがあるが、そうすると観ている側の生徒には理解不能になってしまう。上演する側の生徒にとってみれば「面白いことを言ってもウケない」という印象を抱くことになる。対話文を作る段階から、クラスみんながわかる英語を使うこと、という点を徹底させておく必要がある。

## 2.2. 中学2年生(52期生)

### 2.2.1. 中学2年生のスピーキング指導目標

中学2年生のスピーキングの指導では、スピーキングシラバス案の基礎期の目標を基にして、①個々の発

音・連音・リズム・イントネーション、②絵や物をヒントにした oral reproduction、③身近な事柄を説明することなどを指導目標にした。

### 2.2.2. 日常の授業における指導

#### 2.2.2.1. 音読指導

音読はスピーキング能力の基礎を作るものなので、重視して指導を行った。授業の進行の手順としては、テキストの意味を説明した後に行った。最初に sense group の chunk ごとに、次にセンテンスごとに、chorus reading を行い、それが修得できた段階で individual reading に移った。

すべてのセクションでは実施できなかったが、read and look up を各課で必ず取り上げて指導するようにした。日本人の学習者はしばしば、prepared speech を行う際に用意したテキストを読み上げることが多いと指摘されるが、read and look up の練習はこのような弱点を克服する手段の一つであると考えられる。

対話文からなるセクション（課）では、ペアによる音読練習も行い、時には何組かのペアに教室の前に来て音読させた。

#### 2.2.2.2. 英問英答

通常の授業では、新出単語の解説の後に、Pre-questions としてセクションの概要を尋ねる質問を英語で二つ三つ行い、テープによるリスニングを2回させた後にその答えを生徒に確認する。英問は、新しいセクションに入るたびに生徒に配布するプリントに書いたものを用いることが多い。このように、英語による質問は、通常リスニングによる概要把握のために実施している。しかし、セクションによっては、テキストの意味を説明した後内容の理解を一層深めるために、英語による質問をさらに追加することもあった。

### 2.2.3. 学期末の課題

#### 2.2.3.1. Show and Tell (1学期)

1学期末には、performance test として show and tell を生徒全員に行わせた。生徒の原稿を事前に全員分集めて目を通し、簡潔なコメントを書いて生徒に返した。アイデアがまとまらない生徒には個別に簡単な面談をする機会を持ち、アドバイスした。performance test は二日に分けて行い、初日は ALT がアドバイスとコメントを加えた。生徒たちには、原稿からできるだけ目を離して聴衆に話しかけるように指導した。評価は、内容(content)、流暢さ(flucency)とアイコンタクト(eye contact)の3点から分析的



(analytic)に行った。個人差はあったが、生徒の活動はこちらの予想を上回るものが多かった。発音やイントネーションで改善すべき点については、ALTやJTEが助言した。

次の作品は、小学校の卒業の時に贈られた記念品をテーマにした show and tell の原稿である。少し誤りもあるが、訂正せずに掲載する。

Hello everyone. Today I'd like to show you my memento from the elementary school. This is it ... where is it? Well, I'm wearing it right now! Yes, it is this T- shirt.

What's so special about it? It's my school's graduation memento. *Greenacres* is my school's name, and the year 1997 is the year we graduated. It is still big for me.

In the back, there is a sign of 69 alumni. 44 boys and 25 girls. My sign is over here, on the lower left corner.

I could still remember the day we graduated. We had a graduation concert that day. When the concert finished, we went outside to the ground and ran around.

It was a nice memory, and I could always remember it as I wear this. Thank you for listening.

#### 2.2.3.2. スピーチ (2学期)

2学期末には、「私の夢」(My Dream)というタイトルのスピーチを全員に行わせて将来の夢を語らせた。*New Crown English Series 2*の第7課 *Speech - My Dream* を学習させた後に、補助教材として *Sunshine English Course 3*の第8課 *My Dream* を用いた。

生徒にスピーチを行わせる前に、①スピーチの構成と表現、②スピーチをする時の心がけ、についてプリントを配布して指導した。①については、例えば導入の部分では、"Hello, everyone. Today I'm going to talk about my dream ..."という言葉で始めること、結びの言葉として"Thank you (for your attention)."  
を使うこと、"First, ... Second, ... Third, ..."のような理由の列挙の仕方等を教えた。②については、特に視線を聴衆に向けて大きな声で話すように指導した。

評価は、1学期に実施した show and tell と同じ基準 (内容・流暢さ・アイコンタクト) の3点を考慮し

た。スピーチを行った後に原稿を集めて、内容の評価をする際に参考にした。

次のスピーチは、筆者が補助教材として用いた *Sunshine* の *My Dream* を参考にして全体を構成している。

Hello, everyone. Today I'm going to talk about my dream. My dream is to be a public official of the Ministry of Finance. I have selected this dream because I want to do something for the nation.

My father is a public official of the Ministry of Finance. Sometimes he talks to me about his work. I respect him and find his work worthwhile.

It's not easy to become a public official. First, you have to learn law, politics, economics, and so on. Next, you have to pass a national examination to be employed in government.

Becoming a public official is difficult indeed. But I still hope to realize this dream. I will do my best for my dream

#### 2.2.4. ケニアの留学生との交流 (3学期)

3学期は、1,2学期に実施した performance test を行わず、教科書の Lesson 8 Kenya の発展的な活動として、ケニアの留学生を本校に招いて教室で交流をはかった。ケニアの留学生は、カニヴァとフィリップという 20 歳前後の男性で、辻弘氏(元本校教諭)に紹介を頼んだ。カニヴァとフィリップは当時駒場の留学生会館に滞在していて、将来それぞれ化学工学と工業化学を専攻するために日本に勉強に来ていた。4月からは富山の高等専門学校で教育と研究を始めることになっていた。二人とも日本に来てわずか8ヶ月で、800字程度の漢字が書けるようになっていた。

カニヴァとフィリップが来る前に、あらかじめ生徒たちに質問を一人5問以上作成しておくように指導した。交流の当日、カニヴァとフィリップは教室で最初にケニアの言語・独立の経緯・国旗・食物・天候などについて、20分ほど英語と日本語を用いて説明した。その後、生徒と質疑応答を行い和気あいあいとした雰囲気の中で交流は終わった。カニヴァとフィリップはともに、英語・スワヒリ語・キクユ語を自在に話すことができ、さらにわずかな期間に身につけた難しい漢

字を黒板にいくつか書いて、生徒を驚嘆させた。

英語の母語話者でないケニアの留学生との交流は、コミュニケーションの手段としての英語の価値を生徒に再認識させるきっかけになったと考えられる。

### 2.2.5. 成果と課題

1,2学期末に行った performance test と、3学期に実施した国際交流はそれぞれ大きな成果があったと思われるが、スピーキングの日常の指導については以下のように改善すべき点があると思う。

音読については、read and look up の練習にもっと力を入れて、リーディングからスピーキングに発展させる指導が必要である。また、授業で生徒が気楽に話し合える小さなテーマを取り入れて、生徒が自ら話す機会をもっと増やさなければいけない。英間は現在はほとんど教師が作成しているが、時には生徒に作らせて英語のプロダクション力を高める必要がある。

## 3. 「実践期」の実践

「実践期」に移る。「実践期」のシラバス試案は次のようになっている。

### <実践期> 中学3年, 高校1年

- ・リズム・イントネーションの効果的な使い方(応用)
- ・様々な形式による口頭発表(recitation, speech, skit)
- ・より内容のある事柄を英語で伝える(体験談、興味のあることの説明等)

以下、この案に基づいた中学3年, 高校1年の実践を報告する。

### 3.1. 中学3年生(51期生)

#### 3.1.1. 「日本の文化を紹介する」スピーチ

中学3年生のスピーキング指導は、ALT とのチームティーチング(週1回)の最後約15分間に、毎回2~3人のペースで行った。内容は「ALTの先生に日本の文化を紹介する」ということで、生徒に紹介したい事柄を新学期早々に考えさせ、テーマが重複しないように調整して決定した。

生徒は、中学1年次の「自己紹介」から始めて、2年次には、「自分のお気に入りのものを紹介する」というテーマで同じようにスピーチを行ってきている。

そのため、ほとんどの生徒は細かい指導を行わなくても要点をとらえて話すことはできるようになっている。そこで「ALTに内容が伝わればよい」という目標を設定することにした。

ALTには、生徒のスピーチの後で必ず内容についての質問をするように依頼しておいた。一方的なスピーチで終わらないように、何らかのコミュニケーション活動が行えるように配慮したためである。

以下は、生徒の考えたテーマの一部である。

俳句、将棋、剣、和紙、こけし、武士道、足袋、Green Tea、こたつ、みそ、街角の芸能、江戸切子、日本刀、サムライ、ジャンケン、あやとり、迷信、すもう、日本文学、折り紙、日本の家屋、どら焼き、団子、将棋、昔話と西洋の童話、日本のクリスマス、せんす、日本の緑(盆栽・植木)、おとぎ話、すし、国旗、神社、たたみ

生徒が行ったスピーチの例を2つ紹介する。以下は原稿そのものではなく、収録したビデオを視聴しながら筆者が書き起こしたものである。誤りもあるが、特に修正は加えていない。

#### [A君のスピーチ] Edo

Hello, everyone. Today I will speak about Edo city. Edo was a rural and small village for a long time. But Edo developed and gradually became the large city after Tokugawa period. And the political center of Japan was located in Edo. And then Edo had the population of about one hundred million

Edo had a weak point. There were weak in the fire protection. A big fire broke out in Edo.

However, Edo reconstructed after a big fire. Finally, Edo changed into Tokyo in 1868.

#### [B君のスピーチ] Rakugo

I'll tell you about Rakugo. Rakugo is a traditional one-man talk-show. Look at this picture. His name is Utasuke. His name is Koasa. They wear kimono and sit on Zabuton, Japanese cushion. They tell a funny story to the audience. Most of stories have been handed down since the old period. So they don't have to create a story themselves.

Then why has *Rakugo* been popular?  
Because it is very amusing that a man imitates each character's personalities by using funny gestures and different voice qualities.

Stories usually end up with some funny punch lines. *Rakugo* started in 16th century. But at that time people were rather poor. They could afford to listen to jokes and humours. So it had spread to Japan and became more and more popular. Now *Rakugo* is popular in Japan. You can see on TV. And there are even *Rakugo* club set up in many high schools and universities.

Why don't you see *Rakugo*?

A 君は、英語が最も不得意な生徒の一人である。スピーチそのものは単語をひとつひとつ読むようなたどたどしいものであったが、構成的には簡潔によくまとまっていて、理解しやすいものであった。真面目に取り組んだ態度とも相まって「よくここまで話せるようになった」と感激したスピーチであった。英語そのものは誰かの指導を受けたのかも知れないが、中学3年でこれだけ言えれば十分であろう。当然、最高の評価を与えた。

B 君は、英語が非常に得意な生徒である。発音もきれいで、流暢な話し方で、態度も含めて全て素晴らしく高校生と比べても引けを取らない出来であった。本人は海外生活の経験はないが、中学1年の時から英語が好きで得意であった。内容を一読すれば、最高の評価が与えられることは明らかであろう。

### 3.1.2. 評価基準と今後の課題

評価の基準として以下の3点を設定し、それを基に総合的に判定した。

- ・ 内容が伝わったか。
- ・ 内容の構成が分かり易かったか。
- ・ 大きな声で話せたか。

なお、原稿を読みあげるようなスピーチはしないように指導しておいたので、守れない場合には減点の対象とした。発音が不明瞭でよく聞こえなかったり、日本語のような平板な話し方で聞き取りにくいといった点で減点された生徒もかなりいたが、真面目に取り組んだ生徒には、ほとんどA,Bの評価を与えた。

ALTの生徒へのアドバイスは、スピーチ時の姿勢・態度がほとんどであり、にこやかに話しかけるようにいつも注意していた。発音の注意はほとんどしない。生徒のプレッシャーになるからであろう。生徒の発音が不明瞭で筆者がよく聞き取れない時でも、ALTはしっかりと聞き取れていたことには驚かされた。

教科書を朗読するとき上手に読めていた生徒が、スピーチのときにはそれほどでもなかった。考えてみると、教科書の朗読のときにはテープというお手本があったからだと考えられる。抑揚・メリハリをつけて話すという点で、今後のスピーキング指導の課題が残った。

### 3.2. 英語 I (50期生)

— 日本映画を利用したスキット作り —

週3時間の英語Iの授業では、なかなかスピーキングの実践にまでは手が回らないのが現状だが、教科書のレッスンを発展させたコミュニケーション活動の一環として、映画を利用したスキット作りを試みてみた。また同時に、スキットを作りながらの文法事項の定着も図った。

#### 3.2.1. 教材と指導目標

○教科書：SPIRAL ENGLISH I 一橋出版

第9課 "Tora-san" - An Interview with Yoji Yamada

○映像資料：『男はつらいよ・第1作』

*Back to the Future*

○指導目標：①仮定法の初歩的な用法に慣れ、実際の会話で使えるようになる。

②映画を通じ、「英語になりにくい日本語の表現」を考える。

#### 3.2.2. 第9課全体の指導手順

①映画 *Back to the Future* を使いリスニングを中心にして仮定法の導入 <1時間>

②形式に焦点をあてた仮定法の練習 <1時間>

③映画『男はつらいよ・第1作』の視聴 <2時間：オーラルBの時間も使う>

④教科書本文を読む <3時間>

⑤『男はつらいよ・第1作』の1場面をグループ作業でスキットに仕上げる <1時間>  
→表題(3.2.)の試み

⑥スキット発表会 <1時間>

### 3.2.3. スキット作りの指導手順

上記手順⑤について、1時間の授業内での指導手順を記述する。

- ①挨拶と small talk <1分>
- ②ウォーミングアップ：  
仮定法を使ったクイズ <10分>
- ③日常的な日本語を英語で表現する練習：  
『男はつらいよ・第1作』の色々な場面での台詞（「ただいま」「おかえり」「私失礼します」等）を提示し、英語でどう表現すればよいか、クラス全体で考える。 <10分>
- ④スキット作り1：  
『男はつらいよ・第1作』の場面 A をビデオで観て、話の流れをつかむ。 <2分>
- ⑤場面 A の台詞を自分なら英語でどう言うか、個々に頭の中で考える。文字は書かない。 <1分>
- ⑥何人かを指名し、口頭発表させる。 <3分>
- ⑦4人ずつのグループを作り、4人の登場人物の役を割り振る。 <3分>
- ⑧スキット作り2：  
『男はつらいよ 第1作』の場面 B をハンドアウトで提示し、日本語の台詞を見ながら即興で英語に置き換えつつ会話を続けるという作業をグループ内で行う。 <3分>
- ⑨場面 B をビデオで観て、どんな状況での会話を確認する。 <2分>
- ⑩もういちどグループで会話をやり直し、より良いものにする。 <5分>
- ⑪いくつかのグループを指名し、発表させる。  
<7分>
- ⑫⑬で学んだ表現を全体で口頭練習する。 <2分>
- ⑭各グループに「自分達の作った会話を消書してくる」という宿題を出す。 <1分>

#### [場面 A の会話]

つね：あら、さくらちゃん、お帰り。  
寅：さくら！？  
さくら：ただいま。  
寅：さくら…ほんとにお前がさくらかい。俺だよこの面に見覚えはないのかい。  
さくら：あのう…  
寅：さくら…  
さくら：ね、この人誰なの。  
つね：いやだよ。まだわかんないのかい。  
竜造：よく見なよ。

#### [場面 B の会話]

博：ごめんください。  
さくら：はい。  
博：あの、団子 200 円ください。  
さくら：はい。私、持って行ってあげるわ。  
博：そうですか、どうも。  
竜造：博さん、裏からお帰りよ。何も遠回りしていくこたあねえやな。  
博：そうですか。どうもすみません。  
(さくら、鼻歌を歌いながら博のあとを追う)  
竜造：フフフフだって。さくらの方も満更じゃねえらしいな。  
つね：そうなんだよ。そつとときゃ何とかなかしかしれないよ。  
竜造：そうっとか… 寅がいたらすぐこわれるとこだな。

### 3.2.4. 評価方法

前項で述べた手順によりスキットを完成させ、次の授業で発表会を持った。評価の観点は2つあり「①作った会話の内容、②当日の演技」をそれぞれ5段階で評価した。ひとつのグループの成員は全員同じ評価をもらうことになる。

①は、グループ毎に消書したものを提出させ、文法と表現の工夫を判断の基準に評価した。この会話には、どうしても仮定法を使わざるをえない状況が含まれている。そこに気づくかどうか大きなポイントとなったが、ほとんどのグループがスキット作りの過程で仮定法の表現を取り入れることができた。②については、発音の明瞭さと動きの工夫を評価した。

この活動の評価は2学期の成績(100点満点)の1割分に加えた。

### 3.2.5. 今後の課題

今回の試みは、スピーキングといっても、自然な発話を促すコミュニケーション活動にまではなっていない。しかし、グループ作業でスキットをまとめていく過程で、各自が文字に頼らず、自分の頭に浮かんだ英語をどんだん口に出して会話を続けるステップを組み入れた。ある程度、英語で発想することを練習できたと考えられる。

また、文法学習(この場合は仮定法)とオーラル活動の橋渡しも意識したが、それはある程度成果があっ

たといえる。

英語 I・IIの中でこのようなスピーキング活動を頻繁に行うことは、時間数との兼ね合いでなかなか難しい。しかし、1学期に一度は創造的な発表活動を取り入れていきたい。これを今後の課題とする。

### 3.3. オーラル・コミュニケーション B (50期生)

1999年度の授業の「目標」と「方法」を初めに整理してみたい。

#### <到達目標(プロダクト)>

リスニング：自然なスピードで話される英語の概要・要点をつかめるようになる。

スピーキング：学期末に設定する言語活動「スペシャル・プログラム」の場で、実践的なコミュニケーション活動を行う。

#### <目標への到達方法(プロセス)>

リスニング：音変化に慣れる訓練と語彙増強を通して瞬時に decode できる英語のレベルアップを図る。

スピーキング：「音読・暗誦・発音」練習や、文型の口頭練習を徹底的に行い、スピーキングの基礎体力を養成する。

#### 3.3.1. 授業の外的環境

オーラルコミュニケーション B(2単位)は、1時間が ALT とのチーム・ティーチング、もう1時間が LL 教室を利用した授業となっている。このように異なった条件で実施する各時間の特徴を際立たせ、明確に差別化しようと考えた。

##### ①チームティーチングの特徴

これは何と言っても ALT の存在である。その特徴を最大限に活かすべきであろう。我々 JTE には出来なくて ALT にしか出来ないことがある。それは「自分の英語が母語話者に通じた」という手応え・自身を与えてやることであろう。しかし、どのような授業計画を立ててもチームティーチング1時間の中で生徒全員が ALT と話すチャンスを作るのは不可能に近い。これを可能にしようと工夫を凝らすことにした。

##### ②LL教室の特徴

それは、生徒一人一人がテープレコーダを持っていることである。「音声のプリント」といったイメージで音声を配布することが可能である。また、個別練習の時間を確保すれば、各自のペースで集中的に訓練をす

ることが出来る。このような使い方をしてこそ LL は真価を発揮する。

#### 3.3.2. 授業の基本設計

教科書1課は原則として

- a. Before Listening(語句・背景知識の提示)
- b. Listening Up(概要・要点の聞き取り)
  - ・ *Listening Tactics*(音変化等の聞き取り)
  - ・ *Dictation*(細部の聞き取り)
- c. Speaking Up(内容に関するスピーキング)

の三つの部分から構成されている。

このような1課に対して3時間を割り当てた。但し、進度上は「1課に2時間」しか使っていない。どのようにすれば「3時間分を2時間でこなせるか」。そのための工夫が「3時間目③を次の課の1時間目①とオーバーラップさせ、チームティーチングを变形分割授業の同時展開とする」というアイデアである。

以下に、第12課の授業進行を紹介する。

#### 1時間目：チームティーチング<同時展開>

① JTE の一斉授業：12課の内容理解

③ ALT の個人面接：11課 Speaking Up

#### 2時間目：LL 授業

② 前時の内容のディクテーション

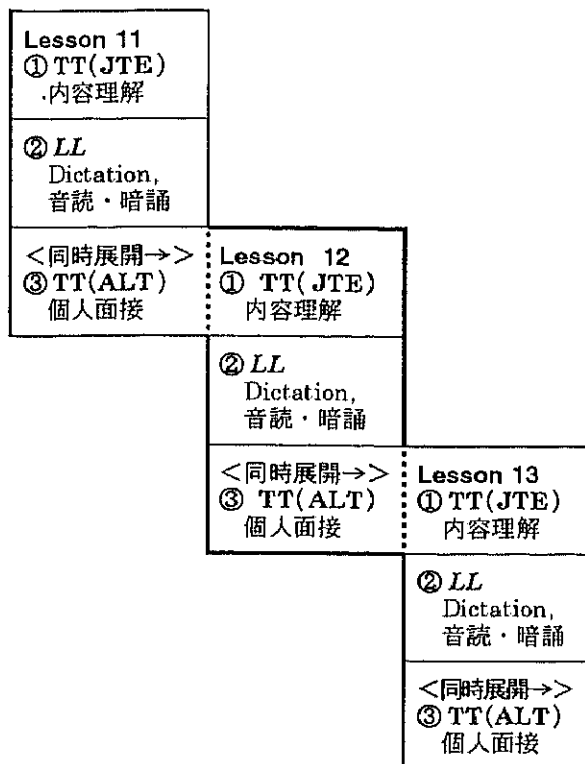
音変化を中心とした聞き取り訓練と音読練習

#### 3時間目：チームティーチング<同時展開>

③ ALT の個人面接：12課 Speaking Up

① JTE の一斉授業：13課の内容理解

チームティーチングの同時展開(オーバーラップ)を中心に授業進行を表記すると次頁のようになる。



### 3.3.2.1. ティームティーチングの工夫

各課1時間目のティームティーチングは同時展開で「①内容理解」と「③個人面接」を行った。イメージがつかみにくいと思われるので「生徒の動き」を中心に再度整理を試みる。

生徒全員：JTEが行う「内容理解」中心の一斉授業を受けている。  
 順番が来た生徒：JTEの授業を「抜け出し」隣室でALTが行っている前課の内容に関する個別面接を受ける。<1人1分×40人>  
 面接が終わった生徒：再び教室に戻り、JTEの授業に加わる。

この方法では「面接に抜けている間の数分は授業に参加することができない」というデメリットがある。しかし、その部分は次のLL授業で補充されるので心配無用である。よれよりも「毎週1分間ALTと個人面接(場合によってはグループ面接)で話をする」という機会を生徒全員に保証することのメリットの方が遙かに大きい。通常のティームティーチング授業1時間で「生徒全員が1分間ALTと話す」ことを実現するのはまず不可能である。

### 3.3.2.2. LL授業の工夫

2時間目のLL授業は前時に内容(content)中心で聞

き取ったものの復習に当てる。ここでは、音変化に焦点を当て「聞き取りにくい」箇所を集中的に訓練する。このような指導の必要性について、久保野(2000c)は「現実の場面で聞き取る」時に必要な方略と、「聞き取る力を育成する」指導との違いに注目して次のように整理している。

タスク中心(task-based)の教材では、一部の情報のみ聞き取れれば正答は得られる。確かに、現実の言語活動では、多くの情報を聞き流し大切な情報を選択的に聞くことが普通である。しかしこのような活動を繰り返していけば、聞き取れる割合は増加していくのだろうか。そうとも言い切れまい。伸びるのは、「リスニング力」そのものではなく、一部しか聞き取れなくとも「何とかするテクニック」なのではないだろうか。

結局、聞き取れない箇所は聞き取れないままで終わるのではないだろうか。聞き取りにくい箇所を抽出し繰り返し練習し慣れていくことしていくこと。このような地道な努力を積み上げていかない限り、何年学習しても弱点の克服は望めない。

従ってLL授業では前時に聞いた箇所を聞き直しながらテープに録音し、スクリプト完成のディクテーションを行う。スクリプトが完成すると、それを使って音読・暗誦練習を行う。これは、音変化という「知識」を「技能」に転化させるために有効な練習方法である。この手順を久保野(2000c)は「9段階復習法」を名付け、復習(家庭学習)方法として奨励している。

- ①スクリプトを見ずにテープを聞き返す。
- ②よく聞き取れなかった箇所に意識を集中してもう一度聞き直す。
- ③スクリプトを黙読し、不明な語句・文法事項を調べる。
- ④スクリプトを黙読し、内容を確認する。
- ⑤スクリプトを目で追いながらテープを聞き直す。
- ⑥スクリプトを目で追いながら、テープに合わせて音読する。
- ⑦スクリプトを自力でもう一度音読する。
- ⑧スクリプトを見ずに、テープに合わせて音読する。< shadowing >
- ⑨スクリプトを見ずに、細部にまで集中しもう一度テープを聞く。

もちろん最初の頃は、授業中に「家庭学習シミュレーション」として①～⑨のステップで復習活動の練習をし、復習方法を身につけさせる必要がある。「～しなさい」と口で説明しただけでは所詮「知識」のレベルを出ない。勉強方法を「技能」として「身体に覚えさせる」には実際に繰り返し体験させることが肝心である。

### 3.3.3. 学期末スペシャル・プログラム (1学期)

#### — 菅平旅行記 "Look and Try 99: Sugadaira "

実践期のシラバス試案のうち「より内容のある事柄を英語で使える(体験談, 興味のあることの説明)」に関しては, 5月に長野県菅平で行われた2泊3日の林間学校の体験を題材にした。各自が写真・絵等をOHC (overhead camera)でプロジェクターに投影しながら思い出を語る show and tell である。この活動は, 他学年の実践と重複するので報告は省略する。

### 3.3.4. 学期末スペシャル・プログラム (2学期)

#### — 班対抗英語クイズ合戦 "Quiz Show 99"

シラバス試案の「①リズム・イントネーションの効果的な使い方」「②様々な形式による口頭発表」に対応する活動として「班対抗英語クイズ合戦(Quiz Show 99)を実施した(久保野 2000d)。

これは教科書 *Oral Communication Course B -- Listen* (桐原書店)の第6課 *Guess Who* 中のクイズ番組(いわゆる 20 Questions)の聞き取りを発展させた活動である。教科書のスク립トを以下に引用する。

Do you often watch quiz shows on television?  
Try this quiz. You must guess the name of the person. You are going to hear ten clues. You may write your answers anytime. If your answer is correct, you will get the same number of points as the number of the clue. The person with the most points at the end of the game will win. Who can answer first?

Clue 10: His early life is not clear. Maybe he was born in Italy in 1451.

Clue 9: When he died, he was very poor. He died in Spain in 1506.

Clue 8: He crossed the Atlantic Ocean on a ship called *the Santa Maria*.

(中略)

Clue 3: He believed he had reached India.

Clue 2: He never landed on the North American Continent.

Clue 1: His name is Cristobal Colon in Spanish.

Clue Number と得点に対応していて, 早く正解すれば高得点が得られる仕組みになっている。

ただし「クイズ合戦」を学期末に行う際には時間の制約で, 各問のヒント(clue)を5つに絞り *Five Questions* 方式で実行することになった。

「クイズ合戦」は一種の role play で, クイズ番組の司会者・出題者・回答者の役割に分かれ, それぞれの役割に応じた口調で話すことが要求される。シラバス試案との対応を整理すると, 「クイズという形式」において役割を演ずることで「リズム・イントネーションを効果的に使用する」ことが期待できる。クイズの司会者(MC)の口調は映画のビデオをモデルとして真似するよう指導した。使用した映画は *Quiz Show* (Hollywood Pictures 1994)で, クイズ番組のシーンを抜粋して見せた。この映画は俳優の Robert Redford が監督した作品で 1950 年代のテレビ界のスカンダル(クイズ番組の不正)を描いた社会派の名作で, アカデミー作品賞にノミネートされた。

生徒の具体的な活動に移る。生徒は7人のグループに分かれ, 1人が司会者, 残りの6人がヒント出題者を担当する。各班が出題するクイズは3題で, その内容は「映画・音楽・歴史上の人物」等の様々なトピックに渡る。ある班クイズを以下に再現してみる。

MC: It's nine o'clock -- time of Quiz Show. I'm your host ○○. Our theme is "movies". Now remember you only have 30 seconds to answer each question. Are you ready.

Clue 5: This SF movie was produced in Hollywood.

Clue 4: Harrison Ford played an important role in this movie.

Clue 3: This movie was first produced in 1973.  
(後略)

### 3.3.5. 評価, 及び演出の工夫

評価に関しては司会者・出題者の話す「指示・ヒント」が明瞭な発音で意味が充分伝わるものかどうかを基準に A,B,C,D の4段階で評価した。

- ・A: ヒントや指示を回答者が全て理解できる
- ・B: ヒントや指示一部に聞き取れない箇所がある
- ・C: ヒントや指示が余りよく聞き取れない
- ・D: ヒントや指示の一部しか聞き取れない

このような活動を成功させるには、演出の工夫も不可欠である。ステージ上で活動しているのは、出題する班7人と回答者6人(他の班から各1名出場)の合わせて13人に過ぎない。クラスの3分の2は聴衆である。この聴衆を飽きさせないためにボーナスポイント制度を設け、自分の班のメンバーが獲得した得点を、班員全員にも加点することとした。待っているメンバーも皆必死にヒントを聞きジェスチャーで回答者にヒントを送っていた。声を出さないのは、フロアからの声によるアシストを禁止したためである。

### 3.3.6. 学期末スペシャル・プログラム (3学期)

#### — Dictator's Speech

教科書は最後に「キング牧師のスピーチ」と映画『風と共に去りぬ』を題材として取り上げている。そこで「映画」「名スピーチ」の両方を兼ね備えた映画『チャップリンの独裁者』を教材化し、有名な「独裁者のスピーチ」を演じさせる実技課題を設定した。

今回は暗誦よりも「役割を演ずる表現読み」を重視し、テキストを必要に応じて見て良いとした。ただし、話す時には必ず顔を上げ、チャップリン演ずるヒンケル総統のように聴衆に向かって話すよう指示した。このように read and look up を行うさいには、sense group ごとに改行しセンタリングしたプリントを用意するとやりやすい。また、スピーチの部分をテープに録音して家庭学習のモデルとした。

#### *Dictator's Concluding Speech*

By the promise of these things,  
brutes have risen to power.

But they lie!

They do not fulfil that promise.

They never will!

Dictators free themselves,  
but they enslave the people.

Now let us fight to free the world  
-- to do away with national barriers  
-- to do away with greed,  
with hate and intolerance.

Let us fight for a world of reason --  
a world where science and progress  
will lead to all men's happiness.

Soldiers, in the name of democracy,  
let us all unite!

帰国生徒はそれこそチャップリンそっくり、発音が苦手な生徒もテープを必死に真似ていた。得意な生徒が手を抜かず苦手な生徒が頑張れたのは、やはり題材の持つ力ではなかったか。終了後の休み時間に「4月と比べて随分上手になったね。」と声をかけたところ、その生徒は「1年間あれだけ練習して来たのだから当然です。上手くならなかつたら困りますよ。」と答えてくれた。「中学3年や高校生になると声が出なくても仕方がない」という意見もあるが、それは誤りである。上達の手応えが感じられないために意欲を失っているに過ぎない。自分の話す英語に自信が持てれば、高校生は中学生よりも大きな声で堂々と英語を話すようになる。以上3つの実践は全てビデオに収録してある。興味のある方は是非お問い合わせ頂き、ご覧頂きたい。

### 3.3.7. 「音読・暗唱」指導の徹底

3.5.で評価基準(criterion)として挙げた「聞き取りやすい」英語を話すための訓練として最も有効なものは何であろうか。それは「音読・暗誦」練習である。

この練習がスピーキング能力の育成につながることは従来から指摘されてきた。國弘(1999)では音読指導の効果を次のように述べている。

ふつうは文法と音読は関係ないと思われているようですが、そんなことはありません。どの単語をまとめて読みどこで区切るかは、文の構造つまり文法と密接な関係があります。(中略)

文法の点から分析的に聞けるようになれば、応用力がついてきます。テープというモデルがない文でも、それなりに音読が可能になるのです。みなさんは、毎朝届く新聞の記事を、モデルがなくても、それなりに相手にわかるように音読できますね。それと同じことが英語でもできるようになります。(下線部は引用者による)



また、土屋(2000)は、テープや教師という「モデルから自立」することの必要性を強調している。

この(引用者注：モデルの後に続ける)音読練習法では、生徒は常にテープや教師のモデルを真似ることになる。これが問題である。このやり方を続けていると、生徒はモデルがないと自力では読めないという、非常に困った習慣を身につけてしまう。(中略)

要は生徒自身にどう読むかを考えさせることである。いつもモデルを先に与えるのではなく、どこで区切って、どこに強勢をおき、どんな抑揚をつけるかを、生徒自身に研究させるのである。自力で正しく音読できるようになるためには、このような指導を中学校2年生あたりから少しずつ積み重ねていくことが必要である。

(下線部は引用者による)

例えば、次の文章を音読させると下線部の二つの and の働きの違いに気づき、その違いを明確に音声に反映できる能力が身に付いているかどうかよく分かる。「単語と単語」をつなぐ and と「文と文」をつなぐ and をどのように区別して音声化すれば良いのか、そのシステムが身に付いていなければ、分かりやすく話すことなど不可能である。

The Olympic Games began in Olympia, in Greece, in 776 B.C. At first they lasted only one day and there was only one race. Later there were more races and other contests and the Games lasted several days.

(The World around Us, OUP)

久保野(2000a)は「音読→read and look up→暗誦」という指導手順の目的・内容について以下のように説明している。

スピーチ原稿も教科書の本文も「内容を知っている文字テキスト」という点では変わりがない。キーワードをたよりに内容を思い出しながらテキストをレシテーションするという点では全く同じと言える。従って、毎時間行う教科書の音読・暗誦指導が成功すれば、スピーチ指導は原稿のライティング指導に焦点化できる。

教科書本文の「音読」から「暗誦(recitation)」に至る指導の流れは以下の通りである。

① Reading Aloud …区切り・抑揚・リズムに注意を向ける

- a) Model
- b) Chorus
- c) Individual
- d) Read and Look Up

② Recitation …黒板に書いたキーワードを参考に内容を再生

- a) Model …教師による見本の提示
  - b) Chorus …教師の指すキーワードを見ながら全体練習
  - c) Individual …個々に指名して上達状況をチェック
  - d) Presentation …全体の前で発表
- d)はスピーチのシミュレーション的活動になる。

このように練習した recitation は引き続き家庭でも練習させ次の授業の初めに Review として発表させる。発表者は教師が指名するのではなく、原則としてボランティアを募る。希望者がいない場合は前の発表者が次の発表者の「指名権」を行使できる。結果として誰に発表の順番が回ってくるか予測することができず、生徒は一生懸命に練習せざるを得ない。

### 3.3.8. 文法・文型「口頭練習」の再評価

音読・暗誦練習に加えて、文法・文型の pattern practice 的な「口頭練習」も重要である。「コミュニケーションに役に立たない」と批判される文法ドリルであるが、方法を工夫すればスピーキング力育成のための極めて有効な練習として機能する。

従来の文法練習は、とすると「黙々と書き換え練習を行いその結果を口頭で確認するだけ」というパターンであった。口を開かないのであるから、スピーキング力の育成は望み薄である。しかし、この問題点は「口に出して言えないことは書かない」という流れを徹底するだけで解決できる。そのための指導手順は次の通りである。(久保野 2000b)

- ①筆記用具を置かせる。
- ②適切なリズムで「意味を音声化」できるまで口頭練習する。書きながらでは声が出ない。筆記用具を持たず、文字を頼らずに練習することが肝心。

③時間を与えて口頭練習の内容を書き取らせる。  
適宜、机間巡視して質問を受ける。

「仮定法過去」を例にとって具体的に説明する。

- ①まず「直説法」の文を聞かせ、次に板書する。  
・ I can't attend the party because I have to work tonight.
- ②意味を確認し、対応する「仮定法」の文(*But if...*)を指名して言わせる。この時に絶対に書かせないことが肝心である。  
→ *But if I didn't have to work tonight, I could attend the party.*
- ③全員で口頭練習した後、適宜個別に指名して確認する。ここでも鉛筆は持たせない。
- ④時間を取って③で練習した文をノートに書かせる。同時に机間巡視を行う。

このように手順を変えるだけで「文字を見ずに、意味を考えて話す」というスピーキング練習となる。

英語の習得が技能の修得であるとする、スポーツとの類似点が多いはずである。技能はある意味では「身体で憶える」ものである。技能の修得には徹底した訓練が必要であることは疑う余地がない。そこで、筆者は学期末の実技課題は「公式戦」、日々の授業における口頭練習は「筋力トレーニング・素振り」と同様だと捉えている。厳しい練習であっても上達すれば楽しくなる。「厳しく楽しい」という授業が筆者の目標である。

#### 4. 「発展期」の実践

「発展期」に移る。「発展期」のシラバス試案は次のようになっている。

- <発展期> 高校2, 3年
- ・ より高度な内容を英語で伝える
  - ・ 自分の考えが相手に正確に伝えられる
  - ・ 意見交換ができる(discussion, debate)

#### 4.1. 英語II (49期生)

##### 4.1.1. 「英語のことわざ」を入れた会話 (1学期)

1学期には「より高度な内容を伝える」ということに焦点を当て、「英語のことわざ」を入れて会話を作る、という実践を行った。これは既に谷口他(1999)で寺田

が実践報告済みであるが、筆者の場合はティーム・ティーチングの時間に行った。

寺田と同様、一つのことわざでおちに向かうための様々な会話が作られた。ただひとつ気になったのは、発音的に聴衆に向かってはつきり伝わっているか、という点であった。そこで、2学期はさらに発展的な内容に取り組みさせるのではなくて、あえて基本に戻ることにした。

##### 4.1.2. 表現読み (2学期)

基本に戻る、とはいっても高校2年生なので、単に発音に注意させるだけでは物足りない。そこで課題の英文を与え登場人物の心理を表現することに留意して発表させることにした。いわゆる「表現読み」である。

課題の英文は、*The Student Times*の「英語レシテーション・コンテスト」の課題文であった、O. Henryの*Spring A La Carte*の簡約版である。これは少女とその恋人との関係が、離れたところに住むことで危くなる物語で、あちこちに少女の気持ちが揺れる部分が出てくる。例えば、次のような部分である：

Sarah sat down at her typewriter and put in a card. Today there were more changes than usual. A feeling of spring was in the menu. Sarah's fingers moved quickly. Just before the desserts was the list of vegetables. Carrots and peas, asparagus on toast, tomatoes and corn and beans, cabbage -- and then --

この最後の部分のメニューを列挙した後に、どういうことが続くかを引き出す *and then* の間合いなどは結構難しいものである。

基本的な読みの指導は ALT が行い、どのように表現するかのアレンジは各生徒に任せた。男子生徒が少女の心理をどう表現するか、非常に興味深かった。

発表当日は、課題文中の2カ所(下記 Evaluation Sheet の①②)のうち好きな方を選ばせ、全員の前で発表させた。発表の前は正直言って不安であった。高校2年生が果たして朗読を発表するということを熱心に取り組むだろうか。聴く側も、わずか2つのバリエーションで最後まで飽きずに聞いているだろうか。

ところがすべては杞憂に終わった。発表する側は、いったん前に立つと真剣であった。あるわずかなパッセージを読むということも、全員の前に立つて行うことはかなりの緊張を伴うのである。中には、主人公の

サラの部分は少し声を高めたり、地の文を落ち着いた声に変えて発表した者もいた。わずか2つのバリエーションとはいえ、それぞれが微妙に違うのだ。また、そういう状態だったから、聴く側も最後まで飽きることなくしっかり聞いていた。

なお、評価としては筆者と ALT が別々の用紙で評価し、2人で話し合っただけで決めた。生徒の反応も表現力のある発表には自ずから拍手も多く、評価が大きくズレたものはなかった。

Evaluation Sheet Class \_\_\_\_\_ No \_\_\_\_\_

① Sarah sat down at her typewriter and put in a card. Today there were more changes than usual. (中略)

Sarah was crying over her menu. Tears came up from the bottom of her heart and filled her eyes. Down went her head to the little typewriter.

She had received no letter from Walter in two weeks and the next thing on the menu was dandelions -- dandelions with some kind of egg -- but forget the egg! -- dandelions -- those yellow flowers that Walter had put in her hair -- dandelions the sign of spring making her remember her happiest days.

② "Why haven't you written -- oh, why?" cried Sarah.

"New York is a pretty large town," said Walter Franklin.

"I came a week ago and went to your old address. I found that you went away. I looked for you everywhere. I even asked the police."

"I wrote!" said Sarah.

"I never got your letter!"

"Then how did you find me?"

The young farmer smiled a springtime smile.

"I went into that Home Restaurant next door this evening," he said. "I looked at the nice typed menu looking for something I wanted. When I got below cabbage, I fell out of my chair and called for the owner. He told me here you lived"

"I remember," said Sarah, happily. "That

was dandelions below cabbage."

\*Intonation

\*Pronunciation

\*Comments (if any)

#### 4.1.3. 朗読発表の意義

高校2,3年生で発展期となると、ついディベートやディスカッションに目がいきがちである。もちろん、十分な準備の後に行うのは結構なことであるが、しばしば形式だけが一人歩きしてしまうことがある。一方、朗読発表というのは派手さはないし、「発展期」でいかなものか、という声もあるかもしれない。しかし、英語を読むということは誰にでも準備ができる。そして英語がうまく読める、ということは単純なことかもしれないが、大きな自信につながる。この発表後、約1年後の高校3年次に行った「カリキュラム改革調査研究プロジェクト」のアンケートの中で、ある生徒は次のように書いていた。

高校2年の時に Sarah sat down at her typewriter...の文章を教壇の上で読む授業で、英語のリズムが好きになった。

わずか10行ほどの文章を読む体験がこれだけの効果を生み出すこともある。これは大きな発見であった。

#### 4.1.4. 今後の課題

3学期にリンカーンの Gettysburg Address を扱った(八宮 2000)。これもわずか200語前後の演説であるが、多くの意味を含んだ素晴らしいものである。ところが、2学期の朗読が成功しその効果は分かっていたはずなのに、リンカーンの授業の後は別の短編に進んでしまい、結局発表させる機会を逸してしまった。これは今から考えても失敗だと思われる。英語を読み自分なりに解釈し音として表す、このような oral interpretation 活動にもっと重点が置かれても良いのではないか。

#### 4.2. リーディング(48期生)

##### 4.2.1. スピーキングの指導目標

高校3年生の選択科目「リーディング」では、その

名の通り読解力をつけることが主な目標であるが、「ことば」であるという基本を念頭におき、4技能をバランスよく指導することに留意した。授業ではリスニングを並行して行い、すべての活動がスピーキングにつながるような指導展開を目指した。

#### 4.2.2. スピーキングへの動機づけ

発展期では「より高度な内容を英語で伝える」ことが目標のひとつとしてある。そのためには生徒の知的興味・関心のあるより高度な内容を教材として選ぶことが先決となる。「リーディング」の授業なので、教材としてはやや深みのある環境・医療・人権問題など世界的に起こっている問題を取り上げた。例えば、*The Real World Today*(桐原書店)や'Small Is Beautiful' / Satish Kumar, 'Don't Sweat the Small Stuff' / Richard Carlson などメッセージ性のあるものを題材にした。そのことで生徒の問題意識を高め、発話の動機づけとなるような指導展開を試みた。

#### 4.2.3. リーディングを通してのスピーキング指導

学習指導要領にもあるように、「意志伝達を行うために、伝えたい事柄の内容を整理して、重要なことを落とさないようにして話す」ことはコミュニケーション活動で最も重要なことである。要点をまとめ更に口頭発表できるようにする練習としては、パラグラフ・リーディングが適切な方法である。より速くより正確に内容をつかむには、語や文単位で意味をとらえるのではなく、パラグラフ単位で意味をとらえることが必要になってくる。パラグラフ・リーディングの手法を取り入れることで、内容を正確に捉える練習にもつながり最終的には伝達内容を整理して話すというスピーキングの力を養うことにもなる。

Satish Kumar 氏による'Small Is Beautiful'を題材に選び、タスク・シートを利用し段階を踏んだ活動の一例を紹介する。

<活動手順>

- ①タイトルや小見出しからどのような内容であるか主題を発表する。
- ②パラグラフごとの要点をタスク・シートにまとめる。
- ③トピック・センテンス、内容(body sentence)、結論を確認する。
- ④パラグラフごとに内容に応じて適切に音読する。
- ⑤英語で概要をまとめ口頭発表する。

#### 4.2.4. リスニングを通してのスピーキング指導

本校のリスニング・シラバスでは「聞き取った内容に対して自分の意見を述べる」ことが目標にある。発展期において、聞き取る際の活動は5W1Hという点にだけ焦点を当てるのではなく、話し手の主張・メッセージに重点を置いてリスニング活動を展開することで、生徒の意見を引き出すような手がかりが期待できる。そのためにも、題材の検討は重要な課題となる。また指導者も、生徒に訴えかけたいことを明確にすることで、発言意欲を持たせるきっかけが作れる。

以下は視聴者からの質問・意見に応える実際のトーク番組 *Daian Reim Show* を利用した活動の例である。

<活動方法>

- ①音声のみで、視聴者からの質問を2回聞きその内容を確認する。
- ②①で聞いた質問・意見に対する Radio Host の意見・主張を聞く。長い場合には部分に分けて聞く。
- ③論点の中心を再度聞き、主張している点は何か、タスク・シートを利用して要点をまとめる。
- ④番組全体をスクリプトを見ながら聞き、視聴者からの問題に対する解決方法及び結論は何かを発表する。

#### 4.2.5. 成果と反省

スピーキング活動の動機づけとなるような題材選択に時間をかけたことで、生徒も単なる読みや聞き取りに終始せず、自分たちに投げかけられた問題として捉え発言する動機も持てたようである。またスピーキング活動を的確にするためにタスク・シートを利用し要点をまとめる練習を行ったことで、話す要領の手助けとなっていることは確かである。

高校3年の選択「リーディング」ということもあり、実際に時間をかけて生徒のスピーキング力を伸ばすということは難しい課題ではあったが、パラグラフ・リーディングやリスニングを通して「自分の意見をまとめ、要点を明確に伝える」という要領は学んだのではないかと期待している。

### 5. 課題と今後の展望

#### 5.1. 残された課題

鈴木他(2000)の最後で末岡が指摘したように、シラバスはある意味では「仮説」と言える。「仮説」は「検証」の義務を伴う。設定した「目標」及び目標達成のための「方法」が妥当であるかどうかは、絶えず検討されなければならない。シラバス・デザインに必要な構成要素として Brown(1995)は以下のような

要素を挙げている。

- ① Needs analysis (学習者のニーズ分析)
- ② Goals and objectives (目標・目的)
- ③ Testing (学習者のテスト・評価)
- ④ Materials (教材)
- ⑤ Teaching (指導法)
- ⑥ Program Evaluation (シラバスの検証)

シラバスデザインでは、evaluation と testing / assessment を厳密に区別して用いる。⑥ Program Evaluation は「シラバスの検証」を指し、③ Testing は「学習者の能力・到達度」の評価を指す。

この⑥ Program Evaluation(シラバスの検証)に、本稿では言及することが出来なかった。それはこの部分の実践が欠けていたからに他ならない。また、③ Testing に関してもより具体的な記述が必要と求められるであろう。これらの点は今後改善したい。

一方、② Goals and objectives, ④ Materials, ⑤ Teaching に関しては、記述スタイルのばらつきは残ったが各実践の中である程度報告できたと考えている。

## 5.2. 今後の展望

今後は先ず「シラバス(仮説)の検証」までも含んだ実践の充実を図っていくことが求められる。また、実践の記述方法を検討し、より具体的で分かりやすく「追試可能な」実践報告ができるよう心がける所存である。

本プロジェクト(5年計画)は現在3年次を迎えている。次回は2000年度に検討した「リーディングのシラバス」に関する報告を予定している。

## < 注 >

本稿は、各学年担当者が分担執筆したものを係(久保野)が整理しまとめたものである。各実践等の執筆分担は以下の通りである。

- 1. 中高一貫のスピーキング・シラバス …久保野
- 2.1. 基礎期 (中学1年) ……末岡
- 2.2. 基礎期 (中学2年) ……寺田
- 3.1. 実践期 (中学1年) ……加藤
- 3.2.1. 実践期 (高校1年: 英語I) ……平原
- 3.2.2. 実践期 (高校1年: オーラルB) …久保野
- 4.1. 発展期 (高校2年: 英語II) ……八宮
- 4.2. 発展期 (高校3年: リーディング) …鈴木
- 5. 課題と今後の展望 ……久保野

## < 参考文献 >

- Brown, James Dean(1995) *The Elements of Language Curriculum -- A Systematic Approach to Program Development*, Heinle & Heinle
- Centre for Canadian Language Benchmarks, The (2000) *Benchmarks 2000*.  
<http://www.language.ca>
- Department for Education and Employment(2000) *National Curriculum*.  
[http://www.nc.uk.net/general/mfl\\_ks2.html](http://www.nc.uk.net/general/mfl_ks2.html)
- Department for Education and Welsh Office Education Department(1995) *Modern Foreign Languages in the National Curriculum*, London:HMSO
- 八宮孝夫(2000)「Gettysburg Address の教材化」『英語教育研究(FELT)』第16巻 (財)語学教育研究所
- 久保野雅史(1997)「スピーチ指導の改善」『英語教育研究(FELT)』第13巻 (財)語学教育研究所
- 久保野雅史(2000a)「音読指導の基本」『楽しい英語授業』第18号 明治図書出版
- 久保野雅史(2000b)「研究大会での授業(ELEC)映画を用いた文法事項の導入——『オズの魔法使』で仮定法——」『STEP 英語情報』2000年3-4月号 (財)日本英語検定協会
- 久保野雅史(2000c)「リスニング指導の基本」『楽しい英語授業』第20号 明治図書出版
- 隈部直光(1996)『英語教師心得のすべて』 開拓社
- 國弘正雄(1999)『國弘流 英語の話し方』 たちばな出版
- 緑川日出子(1999)「今こそ変身のときです」『現代英語教育』1999年3月号 研究社出版
- 鈴木文子他(2000)「中高6年間を見通したシラバスの作成(1)——リスニングのシラバス」『筑波大学附属駒場中・高等学校 研究報告・第39集』
- 高橋一幸(1999)「自分の授業をどう評価するのか——Top-down方式による授業設計と改善の視点」『英語教育』1999年5月 大修館書店
- 谷口幸夫他(1999)「コミュニケーション能力の評価——評価法の改善を目指して(3)」『筑波大学附属駒場中・高等学校 研究報告・第38集』
- 土屋澄男(2000)「英語の基礎をつくるオーラル中心の授業」『STEP 英語情報』2000年11-12月号 日本英語検定協会